

ほうほく
「抱樸館福岡」
1周年
報告・記念講演会

人と人との絆を結び 伴走してきた「抱樸館福岡」

～人と人が助けあう「共助」のシステムを地域の中に作りあげてきました～

2010年5月1日、福岡市東区多の津に開所した「抱樸館福岡」は、命の危険にさらされている生活困窮者に対して、あらゆる相談を受け付け、住居を提供し、就職や福祉手続きなどの自立支援を行うホームです。物理的な「ハウス」であると同時に、入居者と地域の人たちがつながる「ホーム」となることを願いスタートしました。2011年7月29日に開催された「抱樸館福岡1周年 報告・記念講演会」には、行政関係者、地域住民代表、福岡自立支援居宅協力者の会、社会福祉法人グリーンコープ関係者、組合員など約130人が参加し、1周年を祝いました。挨拶と記念講演の一部を紹介します。

※1 第2種社会福祉事業、無料低額宿泊施設

新たに仕事を
創り出す



社会福祉法人グリーンコープ理事長
行岡良治さん

はじめて受け入れた入居者は10人で、その後徐々に増やしていきました。時間をかけてスタッフと入居者との関係をつくっていきたいと考えたからです。それには半年位かかりました。昨年11月から就業準備訓練としてファイバーリサイクルの仕事をはじめ、うになり、抱樸館の雰囲気が変わってきました。汗を流して働くという日常を獲得することで、人と人とは前向きに関係をつくっていきけるのだと思います。

※2 「樸（ほく）」は荒木（あらき）。すなわち原木の意。「抱樸」とは、原木・荒木を抱きとめること。老子のことはより

「抱樸」という意味を
心に刻んで



社会福祉法人グリーンコープ副理事長
北九州ホームレス支援機構理事長
奥田知志さん

人間そのものが排除されていくような時代を迎えようとしています。その中で、抱樸という言葉の意味、この建物が体現しようとしている事柄の意味を深く心に刻んで挑戦していきたいと思えます。一番苦しんでいる人、一番しんどい思いをしている人のところからこの世界を見直していく、その目線から私たちは見ていく、そういう抱樸館でありたいと思っています。



抱樸館福岡外観



入居者のいこいの場になっている庭

記念講演

地域社会における包摂の取り組みをめざして

～抱樸館福岡に期待するもの～



厚生労働省 社会・援護局
福祉基盤課 課長補佐
荒川英雄さん

これからの国づくりのあり方として提示された「新しい公共」がめざすのは、「一人ひとりに居場所と出番があり、人の役に立つこと」の幸せを大切にする社会です。そのためには、国民

の多様なニーズにきめ細かく応えるサービスを、市民、企業、NPO等が無駄のない形で提供することが求められています。奥田さんがはじめたホームレス支援は国をも動かすものでした。抱樸館福岡ができて1年が経ちました。これからは、そこに関わる人や地域で暮らす人々が、数々の経験を蓄積し、次の成長につなげていくことを期待しています。



福岡自立支援居宅協力者の会を代表して、山崎孝徳さん（株式会社ワイスプランニング代表取締役）



福岡市東区多の津5丁目町内会の皆さんを代表して、吉田学さん

抱樸館の取り組みに大きく貢献していただいた町内会の皆さんと、福岡自立支援居宅協力者の会の皆さんへ感謝状を贈呈

抱樸館のこれまでの歩みと、 これからめざそうとしているもの



抱樸館福岡館長
青木康二さん

うは、よいことばかりではありません。時にけんかをしたり、傷つけたり、傷つけられたりしながら、入居した一人ひとりが人としての絆を取り戻していったように思います。

2010年5月の開所から1年が過ぎ、少しずつ増えていった入居者も現在満室で待機者が出るほどになっています。抱樸館の役割が行政へ認知されるようになり、福岡市がシェルターとして借り上げることにつながりました。また、生活に困り、行き場を失くした方が行政の窓口へ駆け込み、抱樸館の入居につながることが多くなりました。入居者を中心に、地域の方、スタッフそれぞれの距離が縮まって、新しい地域社会の姿が少しずつ形になってきているように思います。

この1年、入居者260人のうち170人が地域へ自立していきました。「食事がおいしかった」と多くの退居者の言葉からも、手作りの3度の食事は、家庭の台所を思い出し、自己肯定感を取り戻す大切なきっかけになっているようです。そして、人と人が向きあい、共に助けあうことを念頭に、日常の活動の中から、茶話会や料理教室、交流スペースとなるカフェの設置、園芸部などの活動が立ち上がっていききました。そのような人と人との関係のありよ



園芸部が育てたトマト